



# 和漢洋折衷の尾山神社神門

東日本建設業保証株式会社  
建設産業図書館  
**江口知秀**  
Tomohide Eguchi

**J** R金沢駅前の大通りを進むと近江町市場に突き当たる。そこで右に曲がり、百万石通りを五〇〇歩も歩けば、左手の奥まったところに珍妙な建物が見える。明治八（一八七五）年十一月に完成した尾山神社の神門だ。ちなみに尾山神社は旧加賀藩士たちによって、藩祖である前田利家を祭神とし、明治六年に金谷御殿と呼ばれた歴代藩主の邸宅跡に建てられた。

その神門はとも神社の門には見えないが、決して嫌いな意匠ではない。絵本などに描かれた竜宮城の門に似ていて、なんとなく童心が呼び覚まされる。この門について諸資料では、和漢洋折衷の三階建ての神門だ。一階は石積みで、三連アーチの下がそれぞれ通路となっている。その上に立方体の二階、三階が階を追うごとに小さくなって、積み木のようにのっぺりしており、その肩の部分が丸みを帯びているから、どこことなく中国風に見えるのだ。

そして、この建物を西洋風にも見せる決め手は、一階の石積みアーチもさることながら、やはり三階のステンドグラスの窓だろう。完成当初は内部で明かりを灯して、灯台の役割も果たしたといい、屋根の上には八咫の避雷針まで建てられている。このような神門が建設されるに至った経緯は、『尾山神社

神門由来記』に詳しく、なかなか面白いので紹介したい。

さて、多くの藩士の尽力によって出来た尾山神社だが、すぐに問題が持ち上がった。当時の祠官だった前田直信が、旧藩士で金沢総区長の長谷川準也に語ったところ、「今後永続該社を維持するの方策に於て甚だ困しむ処あり」と経営困難に陥っているという。尾山神社を建てた当初は、旧藩士族二万余がその恩遇に浴したもので、祭事の際にはもちろん、平時でも多くの寄付があるものと思っていたが、結果は正反対となってしまった。「星移り物換らば、遂に旧臣子の誠実もおのづから湮滅に属し、漸く旧恩を思ふの念勿る可し」。悲しいかな、人心とは移ろいやすいものらしい。

これを聞いて長谷川は、「実に痛嘆する処」と管内の学校などに働きかけ、祭礼の日には生徒などを参拝に向かわせて、一時は数千人に達する勢いとなったが、やはり長続きはしなかった。

しかし長谷川には秘策があった。すなわち「一大著明の神門を建築し後來該社の繁栄を期し、田夫野娘に至るも渴仰の信を永久に失する勿らしめん」として、田吾作でも崇め奉りたくなるような門を造ろうということになった。こうして出来たのが、「なん

だこれー！」と同行者が仰天した現在の神門なのだ。「おもしろいねー！」と、同行者は楽しそうに笑っている。しかし、当時の金沢市民にとっては笑いごとではなかったようで、長谷川の意図に反して度々取壊し運動が持ち上がった。なかでも明治三十年には「取払い見積り書」まで作成されている。それが、今では国の重要文化財なのだから、まことにもって人心とは移り変わりの激しいものである。



尾山神社神門

[交通] JR金沢駅から徒歩約25分